

選択課題2 SNS社会と教養

未来のための「選択」

次席

よねやま
米山 然

(神奈川県／逗子開成高等学校一年)

序章

映画好きの僕にとって、「ある台詞が胸に刺さる」という経験は少ないことではない。しかし、ひどく深く、ひどく直接的に僕の胸を突き刺した一本の映画を僕は鮮明に覚えている。

『トレインスポッティング』という映画がある。スコットランドを舞台に、ドラッグ、人生、未来などのテーマを描いた映画

だ。一九九六年に第一作『トレインスポッティング』が封切され、二十一年を経た二〇一七年には続編『T2 トレインスポッティング』が公開された。

この二作品には、どちらも「Choose」という単語を多用した長台詞が登場する。しかし、二つの長台詞のテーマは大きく異なる。「人生を選べ。仕事を選べ。キャリアを選べ。家族を選べ。大きいテレビを選べ。洗濯機を、車を、CDプレイヤーを選べ……」

と始まるのは第一作の台詞である。この他にも「健康」「友達」「日曜大工」など、公開当時の誰もが憧れ、手に入れたいと願った魅力的なものが並べ立てられる。主人公レントンの憧れや野心、強い欲望があふれ出すような、胸を熱くさせる台詞で心に残った。しかし、「僕の胸を刺した台詞」はこれではなく、二作目における長台詞だった。

「人生を選べ。ブランド物の下着を選べ。過労死の女が作ったスマホを選び、それを劣悪な工場で作られた上着に突っ込め。」と不穏な始まりを見せる台詞。そして、僕にとつて問題だったのは次の一文だった。「フェイスブックやツイッター、インスタグラムを選び、『誰か見て』と朝食の中身を全世界に公開しろ。」という、長台詞の中のごく一部。これが僕には衝撃的だったのだ。前作では明るく、希望に満ちていた「Choose」の台詞が、皮肉と否定に満ちた暗い台詞となり、僕を強く動揺させた。同時に「これは僕のことだ」という意識が迫ってくる。僕は、この台詞と全く同じことをしたことがある。感動というより、「痛い」という、まさに胸に刺さる感覚だった。朝食をSNSに投稿すること。大げさに言えば、全世界に公開すること。レントン

はそれを皮肉たつぷりに否定する。「Choose」という単語を繰り返して、知らずのうちに現代の人々が選びとってきた望ましくない現実を、ひとつ、またひとつと目の前に突き付けてくる。そして最後にはこう言うのだ。「Choose your future.」

「お前の未来を選べ。」と。僕はそうして「日々の行動は選択である」ということに気づいた。日々僕は何かを選びとる。そしてその全ての選択は未来につながるのだ。ならば、僕は未来のために正しい選択をしたい。僕は現在この時点で、自分の「選択」を見つめなおしたいと強く思った。

SNSはやめられないう。

レントンは朝食をSNSに投稿することを痛烈に皮肉った。その言葉は僕の自省の念を掻き立て、胸をえぐった。そうして僕はSNSについて深く考えるようになった。

自分はなぜSNSを「選択」したのかということを考えてみる。僕が初めてSNSに触れたのは、中学一年生の夏に「LINE」をはじめたところからだった。その秋には「Twitter」と「Instagram」にまで手を出したと思う。三つのSNSを始めたきっかけはどれも「そこにある世界を見て

みたい」「そこにある社会に参加してみたい」という願望と好奇心だった。そして、僕が初めてSNSを持った興味は主に、クラスの仲間が「LINE」上で作るコミュニケーション「クラスLINE」に対するものだった。はじめは「みんなの会話を見てみたい」「僕もそこに参加してみたい」といった単純な興味であって、その範疇を超えるものではなかった。僕がその後「Twitter」「Instagram」を始めたのも、「LINE」の例と同じく「未知の世界への興味」が理由であった。

では、単なる興味から始めたSNSを「今突然やめることができるか？」と聞かれたらどうだろう。僕の答えは「いいえ」だ。理由はいろいろあるが、大きくまとめれば「所属している社会から抜けることへの恐怖」と言い表せられるだろう。例えば、質問が「今突然、世界からSNSがなくなったら受け入れられるか？」というものであれば、僕の答えは「はい」である。SNSのない世界は、多少の不便こそあれ、問題なく回っていくように思うのだ。しかし今回の質問では「すでに所属している社会から抜ける」という条件が伴ってくる。SNSを始める前の自分について考えてみる。

SNSを始めようか迷うのは「グループに参加するか否か」もしくは「新しくグループを持つか否か」で迷っている状態といえる。では、SNSをやめようか迷うというのはそれらと同じようなことだろうか？違う。新しく社会を持つことを断念するのは容易だが、すでに持った社会を捨てるのは難しいことである。

僕にとってSNSは一つの「場所」のようにも感じる。文字数や媒体などの制約の中でみんなが呟いたり、何かを表現したりする。それが評価されたり、話題になったり、それに絡んだり、話し込んだりと自由に楽しむ活発なコミュニケーションの広場のように感じられるのだ。

もしその広場に僕だけが行けなくなったらどうだろう？「発言の場を失う」「周りのとの関わりが薄くなる」「周りの話題についていけない」など様々なことが予想されるし、それらすべてが僕にとってには恐怖だ。今や、僕にとってSNSは生活において大きい位置を占める一つの社会になっている。簡単にSNSをやめることはできない。では、「未来を選ぶ」ためにSNSとどう接していくべきなのか？ SNSをやめられない僕にも、SNSの使い方は変えら

れる。僕はSNSとの接し方を「選択」し直すべきではないだろうか。

朝食の投稿の何がいけないのか？

僕を含めた同年代のSNSユーザーは、朝食の内容や今日の予定、欲しいもの話など、言ってしまうば「くだらない」内容を投稿する。それはいつたいなせだろう？

その一つの理由として「承認欲求」があるのではないかと思う。SNSでは承認欲求という言葉をよく目にする。簡単に言えば「人から認められたい」という欲求のことで、「自分の投稿に『いいね』が欲しい」などがそのいい例かもしれない。それを満たすために僕は素敵な朝食や、楽しい今日の予定や、好きな映画の話を投稿する。そして誰かからの「いいね」をもらうと満足する。認められたような気がするからだ。テストで花丸をもらった時のように。

ではなぜレントンはくだらない投稿を否定するのか。承認欲求は悪いことなのだろうか？ そこで僕に思い当たったのは「まやかしの承認」というものだった。

「本物の承認」と「まやかしの承認」

僕が「Twitter」で呟いたあるツイート

には一万二千件のいいねと六千件のリツイートが付いたことがある。僕が何気なく「このミュージックビデオがすごい」とある海外アーティストのミュージックビデオを添付し、投稿したものが予想外に反響を得たのだ。そのことは僕の周りで話題になり、ふざけて僕のことを有名人と呼ぶ友達すらいた。確かにそれは有名人になったような気分で、鳴りやまない通知と増え続けるカウント数を見ていると嬉しくもなつた。しかし、心のどこかで僕はそれを恥ずかしいと思つた。僕のツイートの「いいね」をした一万二千人が「いいね」と思つたのは僕に対してではなく、そのミュージックビデオの制作陣に対してであるはずだ。意図しない形で、僕は他人の評価を奪つた泥棒になつてしまった。人の輝で相撲を取つたように恥ずかしくなつた。そうして僕はまだまだ「いいね」と「リツイート」が増え続けているそのツイートを削除したのである。

この貴重な経験は、僕に「まやかしの承認」の醜さを自覚させた。人の輝でいいねをもらつて喜んでいては、「まやかしの承認」で欲求を満たしている愚か者になつてしまふ。まやかして満足せず、本物の承認を求めてこそSNSの望ましい使い方の

「選択」といえるのではないだろうか。

マズローの欲求五段階説

学校での倫理の授業中だった。先生が黒板に五段からなるピラミッド型の図を描き、一段ずつ名前を記していく。一番下から順に「生理的欲求」「安全欲求」「社会的欲求」「承認欲求」「自己実現欲求」。「マズローの欲求五段階説」だ。この説では「人間の欲求は五段階のピラミッドのように構成されていて、低階層の欲求が満たされると、より高次の階層の欲求を欲する。」とされている。

僕が目したのは「承認欲求」の位置であった。マズローの示した五つの欲求の中でも「承認欲求」は上から二番目にあり、僕は今その段階にいる。自分が既に三段階の欲求を乗り越え、さらに上の欲求が存在する途上の位置にいるということが、僕に驚きを与えた。

『トレインスポッティング』の場合を考えてみる。一作目での長台詞でレントンが「選べ」と言つたのは「仕事」「家族」「友達」など。これらの「他人と関わりたい」「人間関係をもちたい」という欲求は「社会的欲求」に当たるものではないだろうか。仕

事や家族や友達を手に入れ、社会に仲間入りしようと呼びかけの台詞だ。

二作目になると、レントンにはツイッターやインスタグラムなどのSNSを「選べ」と語る。人は二十年を経てSNSを手に入れた。そして「社会的欲求」をほぼ満たし、「承認欲求」の段階へのほつてきているのだ。ただ、のほり切った人もいればまだのほり切れていない人もいる。本物の承認を求め成功した人もいれば、まやかしの承認で満足してしまう人もいる。僕たちはそんな途上の状態にあるのだ。

僕はSNSという道具、また世界を手に入れたために「承認」を得ることだけに必死になり、本来の自分の目指すところを忘れていた。つまり、僕は「承認」で満足し立ち止まるのではなく、本当はピラミッドの頂点にある「自己実現」を目指すべきなのだ。そうして自己実現の為に努力すれば、人は自然に「いいね」と承認してくれるのではないだろうか。そしてそういった「本物の承認」が心の支えとなり、また僕を自己実現へと前進させるはずだ。

自己実現するためには？

マズローの欲求五段階説において頂点に

あるのは「自己実現欲求」である。自己実現とは何か、辞書を引いてみると「自分の中に潜む可能性を見つけ、十分に発揮していくこと。」とあった。僕なりに言い換えれば「自分の能力を生かし、なりたい自分になること」が自己実現だといえるだろう。

僕がなりたい自分とは何だろうと考え、「かつこいいダンスが踊れる人」とか、「映画について詳しく語れる人」など、部活や趣味についてのことがまず思い当たった。しかし、それだけでは駄目だという違和感があった。ダンスや映画でいくら評価を受けても、それしかないような自分にはなりたくないと思ったからだ。もつと根底にある「人間性」の部分で土台となる美点欲しいと思った。僕が「なりたい」と憧れるのは、社会に貢献できる力を持った人。信頼に足り、尊敬される人だ。そういう人物に必要な物は何だろうと考えた。それは、「教養」ではないだろうかと思つた。「教養」は人間性を豊かにする栄養のようなものではないだろうか。「教養」というしつかりとした土台の上で自分特有の能力を発揮する。それが僕の行きついた「自己実現」のイメージだった。

僕の「自己実現」のためにまず必要なの

は「人間性の基礎工事」として教養を身に付けることの「選択」ではないだろうか。

教養を得るために

阿部謹也の『教養』とは何か？では、あらゆる文献から教養の定義が引用されている。それを読んで僕は、教養の定義が時代や環境によって変わるということを知った。広辞苑において「その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる。」とされているのにも頷ける。教養に、ある一定の定義がないとすれば、僕はどんな教養を目指せば良いだろうか？

僕は、教養に関する様々な文献を読み、「自分の目指す」教養の定義を考えた。多様な表現の中から自分の納得するものを用い、まとめてみると「多識で品格があり、豊かな精神と高等円満な人格を持つ、またはそのために努力している人」というのが「僕の目指す」教養のイメージとなった。そこでふと、「僕が見ているSNSの世界では、『教養』を感じさせる人はそれほど多くないな」ということを思つた。

例えば、「外界との交流」について考えてみる。僕はインターネットに対して「世界に開かれた革新的な道具」というイメー

ジがあった。すぐに調べられ、ときには調べずとも流れてくる世界のニュース。会ったことのない人も簡単に話せるSNS。外国人との交流も容易。インターネットの誕生により、世界はより繋がりがやすくなった。SNSにおいても、それを駆使して世界とつながっている人は多い。しかし、同時に自分を外界から閉ざしている人も多い。いや、そちらの方が多くすら思える。「自分のしたいことができる」というインターネットの特徴は「自分のしたいことだけの世界」に人をとどまらせているとも言えるのだ。

ネットの世界には行動ターゲティングシステムというものがある。自分の投稿や検索の内容から、自分の興味の範囲に該当する広告、ニュース等をAIが予測し、それを表示するというものだ。このシステムにより、SNSユーザーの見える世界は狭くなってしまふ。例えば、友達や共通の趣味を持つ人、好みのアーティストをフォローし、趣味の投稿をしていく。そのうちにSNS上でのニュースや広告は各個人の趣味に合ったものだけになっていく。気づかぬうちに自分の興味の範囲のことだけに囲まれ、それ以外のことに触れるチャンスが

失っていく。そんな状態では僕のイメージする「教養」には近づけないと思うのだ。

世界へつながる窓をいくつも持っているはずのSNSの世界で、多くの人は興味のある窓だけを開き、それ以外は硬く、厚く閉ざしてしまふ。SNSは「外界へつながるドア」にも「自分を閉じ込める殻」にもなりうる。どちらにするかは自分の使い方次第だ。せっかく手に入れた革新的な道具は自分の成長に役立てたいと僕は思う。僕は教養を得るために、SNSを「外界へつながるドア」として使うことを「選択」したい。

SNSで「教養」を育むことは可能か？

では、僕が獲得したい教養とはどんなものか。例えば「名作文学を読んでいる」「芸術に造詣が深い」「国際文化に広く理解がある」「礼儀正しい振る舞いができる」などが僕の憧れる教養の具体的なイメージだ。これらの教養はSNSで獲得できるだろうか。

SNSで名作を読むことはできない。芸術に関するニュースは手に入るが芸術作品の鑑賞は困難。言語の壁はあるが国際交流は可能。文字でのコミュニケーションで礼儀が学べても、直接の対話での礼儀は学べ

ない。

こうしてみると、SNSだけで教養を得ることは不可能なようだ。教養を得るためにはSNSから離れたところで勉強したり、本を読んだり、美術館へ足を運んだり、様々な人と交流を持つなどの多様な経験が必要だろう。

しかし、SNSは教養を得るための大きな一助にはなるようにも思える。世界のあらゆる場所、分野へつながるSNSは僕に新しい教養を得るきっかけを与えてくれるに違いない。それを生かすかどうかは僕の努力と「選択」次第だが、SNSはこれからの世界の大きな位置を占める、大きな可能性となるはずだ。

SNS社会に必要とされる新しい教養

SNSは教養を得るための道具としては不完全だ。しかし間違いなく、これからの社会において大きな位置を占めるものになる。SNSは新しい文化だ。ならば、SNS社会を生きるための新しい教養が必要なのではないだろうか。

SNSは僕たちにとって社会であり、道具でもある。道具を使いこなすために必要なのは有効で安全な使用法の知識だ。SNS

Sの有効で安全な使用法とは何だろうか。

道具を安全に使うためにはまずその危険性を知る必要がある。SNSの危険と公開と、ネット犯罪や、過剰な個人情報公開などと、様々なものがある。その中でも僕が注意すべきだと考えるのは「すべてが記録される」という怖さだ。SNSに投稿した言動はすべてネット上に残る。過去の愚かな言動が未来の自分を、自分の周囲の人々を苦しめることだってあるかもしれない。過去の浅薄な「選択」により、未来の大切な「選択」が邪魔されるというのはとても怖いことだ。

SNS社会の中で生きていくために必要なのは、それらの危険について知り、自分を守る術を身に付けることである。これは現代に必要な新しい教養の一つといえるのではないだろうか。

この他にも、SNSが「人と繋がる道具」であるという点で気を付けるべきことはある。SNSで社会とつながる。世界とつながる。これは、育ち方も、文化も、宗教も違う多くの人と繋がることを意味している。異文化に対する無知や偏見、誤解もSNSによって簡単に世界へ発信されてしまえば、軽いつぶやきが誰かの怒りや悲しみ

を呼ぶことにもなりうる。それが重なれば大きな争いになってしまう。互いの違いを知り、尊重し、配慮する。これも新しい教養といえるはずだ。

教養は世界を変える

SNSを手に入れ、人々は意見を発しやすくなり、社会には以前よりも「可視化された」意見が増えた。意見の集まりは世論となり、世論は世界を動かす。つまり、世界を悪い方向へ動かさうの怖さと、より良い方向へ動かさうの希望という二つの可能性を世論は持っている。そしてSNSは、その世論を可視化することでそれらの可能性の幅を広げた。世界を悪い方へ動かすのもよい方へ動かすのも、僕たちの「選択」によるということだ。

ならば、多くの意見が可視化される今、その意見の一つ一つはより良い世界へつながる良識あるものでなければならぬはずだ。良識を支えるのは「教養」である。僕は、一つ一つの意見が大きな可能性を持つ今こそ、教養の重要性が増していると思う。

SNSによって人々は発言の場を得た。そこで形作られた世論が世界を動かす力になるのなら、それこそがSNSの最も有益

な使用法といえるのではないだろうか。僕たちはより良い方向へ世界を動かすために、教養を身に付けるという「選択」をするべきだ。

現在の自分の「選択」が未来の「選択」の邪魔をする怖さを知ること。世界を悪い方向へ動かす力が身近にある怖さを知ること。それらの「SNSの怖さを知ること」はこれからの社会における重要な教養だ。自己実現のため、そしてより良い世界のためにSNSという新しい道具を有効に使えるように、使い方を慎重に「選択」する。日々の言動を慎重に「選択」する。そうすることで自分の未来を「選択」していきたいと僕は思った。

僕の未来を選ぶために

現代社会はSNSを手に入れた。僕はこれからもSNS社会の中で生きていく。その中で自己実現を模索する。「教養」はそんな僕を支える柱となる。僕のこれからの人生を支える「教養」という名の柱は、強く、太く、盤石なものでなくてはならない。その為に僕は努力を続けるべきだ。その努力が未来の僕を支え、守るのだから。

『T2 トレインスポッティング』の長

台詞は「Choose life」「人生を選べ。」と始まり、「Choose your future.」「お前の未来を選べ」と終わる。その台詞に動揺し、震えた自分を思い出す。日々の行動は「選択」だ。日々僕は何かを選びとる。すべての選択は未来につながる。僕は正しい選択をしたのだ。だから僕は自分に呼びかけ続けることを「選択」しよう。「Choose life. Choose my future.」だ。

《参考文献・資料》

阿部謹也『「教養」とは何か』（講談社）

竹内薫『教養バカ わかりやすく説明できる人だけが生き残る』（SBクリエイティブ）

田坂広志『知性を磨く「スーパージェネラリスト」の時代』（光文社）

家人一真『さよならインターネット まもなく消えるその「輪郭」について』（中央公論新社）

横山雅彦『高校生のための論理思考トレーニング』（筑摩書房）

朝井リョウ『何者』（新潮社）

一九九六年公開映画『トレインスポット』監督・ダニー・ボイル 配給・ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

二〇一七年公開映画『T2 トレインスポット』監督・ダニー・ボイル 配

給・ソニー・ピクチャーズエンタテインメント